

深刻化するフィリピンの政治的殺害

河合大輔

アジア現代女性史研究会 (CAWA) では2005年1月、フィリピン大学のジョイ・バリオス先生の案内で現地調査を行い、タルラック州ルイシタ農園で起きた国軍による農民虐殺事件に関する報告を本誌創刊号に掲載した。農業労働者のストライキ集会に国軍が発砲し参加者7名が死亡したこの事件は、土地を持たない貧しい農民とフィリピンの政治と経済の中心を握る富裕層との対立を象徴する出来事であり、労働争議や土地紛争には軍隊が介入するというフィリピンの厳しい現実を示すものでもあった。

この事件以降もフィリピンでは政治的殺害事件が頻発し続け、一週間に二人、三人と活動家の暗殺が続いている。2006年12月12日にフィリピンの人権団体カラパタンが発表した声明によると、2001年のアロヨ大統領就任からこの日まで政治的理由によって殺害された民間人の数は799名、拉致・行方不明者の数は208名に及んでいる¹。また行方不明者のうち40%は2006年に発生しており²、事態が深刻化していることを示している。かつてのマルコス独裁政権下の14年間で殺害された活動家の数は1,500人とも言われるが³、アロヨ政権下では5年半でその半数もの人々が殺害されており、フィリピン史上最悪の状況とも言える。

人権侵害状況が悪化の一途をたどるなか、フィリピン国内では人権団体カラパタンを中心に数度にわたって国際調査団や国際民衆法廷が開催され、事実を国際的に明らかにする努力が続けられてきた。こうした取り組みを受けて2006年8月にはアムネスティ・インターナショナルがフィリピンの政治的殺害問題に関する報告書を発表。各国メディアでも徐々にニュースとして伝えられるようになった。世界各地のフィリピン人移民組織も告発の努力を開始しており、日本ではCAWAにも参加しているKAFINセンターのアガリン・サラ・長瀬さんや名古屋のFMC (フィリピン人移住者センター) がStop Killings キャンペーンを進めている。また2006年5月、日本政府の開発事業であるサンロケダム建設に反対していた農民運動リーダー、ホセ・ドトン氏が何者かによって暗殺される事件が起きたことから、ダム建設問題に取り組んできたいくつかのNGO 団体も問題を重視して取り組みを始めている。この事件については『世界』2007年2月号に報告が掲載された⁴。

反乱鎮圧作戦「オプラン・バンタイ・ラヤ」

関心と取り組みが広がるなかで、政治的殺害が急増する背景も次第に明らかになりつつある。その一つとして指摘されているのが、アロヨ政権の反乱鎮圧作戦「オプラン・バンタイ・ラヤ (自由の監視作戦)」の

1 "Rights group condemns Arroyo regime for butchery of Filipinos and their freedom", KARAPATAN Public Information, Dec. 12, 2006.

2 "Condemn state terrorism and uphold the Filipino people's human rights!", Philippines - Canada Task Force on Human Rights (PCTFHR), Dec. 10, 2006.

3 "Primer on Oplan Bantay Laya", Ecumenical Movement for Justice and Peace, 2006

4 「農民ホセはなぜ殺されたのか? - アロヨ政権が対応を迫られるフィリピンの「政治的殺害」まさのあつこ、『世界』2007年2月

問題だ。これは国内の反政府勢力に対して2002年に開始されたアロヨ政権の軍事作戦であるが、兵士教育用に作成された国軍のパワーポイント“Knowing the Enemy (汝の敵を知れ)”など流出する種々の資料から、国軍が新人民軍⁵などの武装勢力だけではなく、非武装の合法社会運動にも「コミュニスト」とのレッテルを貼り、攻撃対象を拡大していることが明らかとなっている。“Knowing the Enemy”にはガブリエラ女性党、フィリピン学生同盟(LFS)、全国ジャーナリスト連盟(NUJP)、フィリピン・カトリック中央協議会(CBCP)の名前までが並ぶ。

これまでも殺害現場での目撃証言などから国軍の関与が指摘されてきたが、その積極的、組織的な関与が一層明白となっている。政治的殺害問題は、政府・国軍による意図的な社会全体の軍事化の問題であり、アロヨ政権が極めて独裁的な体制を強めていることを示すものである。

被害者たちの実情

2006年8月18日から29日まで日本の学生団体AASJAの主催で、日本とフィリピンの大学生による合同の現地フィールド・ワークが行われ、筆者もこれに同行した。その際、フィリピン学生同盟(League of Filipino Students: 以下、LFS)の案内で、政治的殺害の被害者たちが避難しているブラカン州の教会を訪れる機会を持つことができた。

学生も標的に

ここで学生・大学をめぐる状況にもふれておきたい。LFSは約1万人の会員を擁する全国規模の学生団体である。1970年代後半に設立されて以来、学費問題をはじめとする学生の権利要求とともに、農地改革や労働者支援などの社会的課題に取り組み、また米軍駐留問題をはじめとする米国によるフィリピンへの政治的軍事的介入、また日本など先進国との間の従属的な経済関係を批判して政治的活動を行ってきた。2005年11月、米兵による集団強姦事件が発生した際、その直後に女性団体ガブリエラとともにいち早く米国大使館への抗議行動を行ったのもLFSだった。

政治的殺害はこうした学生活動家にも広がっている。2006年3月と7月にはLFSメンバーのクリス・ヒューゴー(20)とリー・モン・グラン(21)がそれぞれ何者かによって銃殺された。2006年6月26日には農村調査のためブラカン州ハゴノイの農家に宿泊していたフィリピン大学の女子学生、シャーリン・カダパン(29)とカレン・エンペニョ(23)が国軍兵士と思われる覆面姿の集団に拉致されたまま行方不明となっている。今回訪れた避難所ではこの拉致現場に居合せた農家の少年にも聞き取りを行うことができた。この事件は被害者の親や仲間の学生、農民たちの必死の訴えから全国に報じられ大きな波紋を呼んだ。その結果、フィリピン大学学長は内務自治大臣と国防大臣に対し情報開示と2名の身柄引渡しを求める書簡を送り、最高裁判所も当該地域の国軍当局に対して身柄引渡しの命令を発した。だが国軍当局は「共産党の地下活動にでも入ったのではないか」⁶などとうそぶき、これを無視したままだ。この事件に関してはフィリピン大学福祉及び地域開発学部のジュディ・タギワロ教授をはじめ教員らも学生救出のために奔走し、同大学デリマン校教授会は政府当局の対応を糾弾する決議を採択している。だが二人の行方は今にいたるまで不明のままである。

5 新人民軍(New People's Army)はフィリピン共産党の軍事部門。

6 “Missing activists may be with NPA” Army chief, Inquirer.net, Aug. 4, 2006

避難所での聞き取り

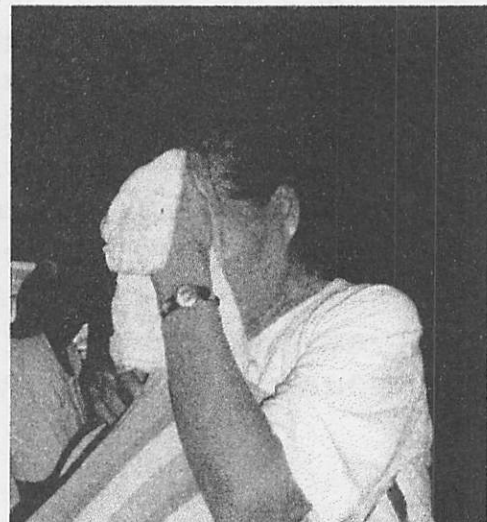
マニラから車で二時間ほど行ったブラカン州パラディレルにあるセント・ジェームス使徒教会には、2006年7月から人権侵害の被害者たちのための避難所が設置されている。訪問した時点で同州の各地から約70人が避難していた。下は生まれたての赤ん坊から上は75歳まで、自らが命を狙われている人、殺害や拉致の現場を目撃し口封じのために身に危険がおよんでいる人、襲撃を受けたが逃げのびた人、またその家族たちが集まっていた。教会の周辺では国軍の協力者や諜報員が徘徊しているために、避難民たちは一歩も外へ出ることができない。そのため仕事をすることもできず、避難所の運営は市民団体の支援によっているが、相当数の人数を収容しており食費を賄うだけでも大変だと聞かされた。以下、聞き取りの一部を紹介する。

ジェフ(21)は高校生で、友だちと一緒に学費値上げに反対するデモに参加したことがある。それに参加した仲間の二人が国軍に拉致されて今も行方不明。二人は拉致された後、デモ参加者の名前を言うように拷問(水を浸したドラム缶に入れられ、電流を流す)を受けて、ジェフの名前を言ってしまった。国軍は拉致した二人のうち一人を一時的に釈放してコミュニティに戻らせ、スパイとして活動させようとした。その友人はコミュニティに戻った時、拷問されたことやジェフらの名前を言ってしまったことを仲間に告白し、事態が明るみになったという。この友人は結局、国軍の方に戻り、国軍が展開するにあたって情報提供やガイドの役をさせられている。ジェフは安全のためにここに避難し、学校にも通えなくなっている。

リージャ・マナハン(55)はある日の夕方、家族とテレビを見ていたところ突然、国軍兵士が踏み込んできて、息子のパトリシアが銃撃された。銃弾は肺を貫通し重傷を負った。一命は取り留めたものの、手は不自由になり入院したままだ。事件後も別に住んでいる子どもの家に兵士が来て、家族が殴られたり、「家を燃やすぞ」と脅されたりしている。踏み込んできた兵士たちは「お前ら全員殺す。新人民軍にかかわっているだろう」と怒鳴った。だが、リージャにとってはまったく身に覚えがない。子どものうち2人は漁民運動に参加しているが、他の子どもは参加しておらず、リージャ自身も銃撃されたパトリシアも参加してはいない。「国軍は家族全員が新人民軍に関わっていると思ったのかもしれないが、実際は違う。もしそうなら一つの家に定住せずに、転々としているはずだ」と話す。

他の人へ聞き取りを行っていた最中もリージャは傍らで泣き続けていた。その日は息子パトリシアの手術の日で、息子の様態、帰れない自宅のこと、働くこともできなくなってしまう今後の生活のことなどで不安がいっぱいだという。最後に彼女は涙をぬぐいながら、「軍隊にはまず村からでてほしい。弾圧、嫌がらせをやめてほしい。国軍は本当なら人々を守るのが仕事のはずだから」と訴えた。

マーシー・ポロ(75)はサンホセ・デルモンテ市のスラムに住む女性。一年前に自分のスラムを立ち退かせる計画があることがわかった。近所の人たちと相談して全国的な都市スラム住民の連合組織カダマイに連絡をとり、法的な手続きやコミュニティでの組織作りなどのアドバイスを受けた。年長だったこともあり、自分がリーダーになった。最近になっ



リージャは聞き取りの間も泣き続けた。



聞き取りに応じるマーシー（中央）
とリージャ（左）。

て、国軍兵士が近所を徘徊し、「マーシーはどこだ？あいつは新人民軍だぞ」と聞きまわっている。また別の情報から自分の名前が国軍の Order of Battle（攻撃命令）に載っていることがわかったため、ここに避難してきた。「私たちは何も悪いことをしているわけではなく、自分たちの権利を訴えているだけ」「普通に考えてどうして私が新人民軍なのか。75歳で銃も持てないし、武装闘争に参加できるはずもないのに」とマーシーは腹立たしそうに話した。

ウィルフレッド・ラモス（14）は前述のフィリピン大学の女子学生2名の拉致現場に居合せた少年である。6月25日、父が農民運動家である彼の家にこの学生たちがやってきた。次の日の未明、眠っていると突然、ドアを激しく叩く音で目を覚ました。外から男たちが「ドアを開ける」と叫んだが、父は危険を察知して応じなかった。だが「開けなければ撃ち殺す」と脅され、やむなくドアを開けるとウィルフレッド少年と父、2名の学生、それに同宿していた農民マヌエル・メリノは押し倒され、縛られて家から連れ出された。シャーリンは妊娠していたが、ウィルフレッド少年は兵士た

ちが「本名を言え」と怒鳴りながら彼女たちの腹を殴ったのを目撃したという。カレンは服を脱がされ、その服で目隠しをされた。静まりかえった深夜の騒ぎであったが、近所の人が駆けつけることはなかった。同地域には国軍によって夜間外出禁止令が出されており、外にいるところが見つかれば「新人民軍」との容疑をかけられるため、怯えて誰も出てこないのだ。結局、学生2名とマヌエル・メリノが車に乗せられて連れていかれた。その後、村を国軍が監視するようになり、現場を目撃したウィルフレッド少年にも身の危険があるため、この教会に避難することにしたという。ウィルフレッドくんは「二人をお姉さんのように慕っていた」といい、「怖かったけど、国軍には腹が立つ。自分が証言しなければ事実が明らかにならないのだから、証人になる」と話した。

この避難所では食事や宿泊など生活の支援を行うとともに、子どもたちへの教育支援、被害者たちが精神的ショックから回復するためのケア活動を行っている。今後は教会の敷地の一角に畑を開設し、避難所のなかでも被害者たちが自分たちで生きる力を獲得できるよう自立支援プロジェクトを行おうと計画している。避難所の財政を支える目的と同時に、被害者たちが尊厳を取り戻すための活動だと避難所のスタッフが説明してくれた。

筆者自身、人権侵害状況の悪化についてはこれまでも何人かの被害者に会い、いくつかの現場を訪れてきたが、大勢の被害者に囲まれ、緊迫した空気の中かで涙ながらに一人ひとりの厳しい状況を聞き、あらためて事態の深刻さに胸が詰まった。

以上、フィリピンでの人権侵害状況の一端を報告した。2001年以降、大幅に拡大している米軍駐留と対テロ戦争の影響や、日本からの開発援助・企業進出などとの関係にも注目しながら、今後もこの問題を注視していきたい。